

## <論文>宴と王権：古事記・日本書紀の事例から

著者	坂本 勝
雑誌名	日本文学誌要
巻	53
ページ	21-30
発行年	1996-03-24
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019857">http://hdl.handle.net/10114/00019857</a>

# 宴と王権

——古事記・日本書紀の事例から——

## 1、はじめに

宴が、歌を中心とする古代の文学を形成する重要な母体であったことはよく知られている。たとえば古事記や日本書紀に記載された歌のうち、歌の内部微証や歌がうたわれた物語的状况などの点で、何らかのかたちで宴との関わりをみせるものはかなりの数にのぼる。万葉集でも、特に後期の歌には宴席歌であることを題詞・左注に明示する例が頻出する。宴歌と書かれていなくても、実際には宴席でうたわれたと推定される歌は多いから、宴と文学は根深くつながっている。そのことは、古代の文学が、個人の心の表現である以前に、集団の場を形成し活性化する機能をもったことを意味する。従って、宴と文学の関係を見るには、その機能を具体的な言葉表現の様相において捉えることが必要になる。また、そこに形成される集団的な場はきわめて歴史的なものであるから、言語表現のあり方も宴の歴史性と不可分にある。宴は人間の文化的営みとして普遍性

坂本 勝

をもつから、宴の歴史性という言い方には熟さない面もある。しかし、後述のように、日本の古代王権が超越的な權威を獲得していく過程で宴は重要な機能をもっており、王権が歴史性をもつ限りにおいて宴もまた同様であったと考えるべきである。

## 2、ウタゲとトヨノアカリ

宴は普通ウタゲと訓まれている。上代の文献にはウタゲの仮名書き例はないが『名義抄』に「譙」(宴と同意)をウタゲウツと訓じていることなどから、ウタゲも上代語として認定されてよい。ウタゲの語義は、『名義抄』の例や顕宗即位前紀の室寿ぎの寿詞「拍ち上げ賜」などから酒宴において手を打つこと、ウチアゲに基づくとみるのが有力である。折口信夫の宴の理論が、ウタゲをウチアゲによると解するところから形成されたことはよく知られている。折口信夫は、ウタゲとは本来、宴の場に來臨したマレビトを列座のものが礼拝することを意味したと解釈する。<sup>(注1)</sup>宴が神事に付随するものでは

なく、神を迎えて神人相和する神事の重要な部分であったという見方は今日では通説となつていふと思われるが、ウタゲの語義が礼拝としての打チ上げであつたかどうかは不確かな面が多い。日本民俗学では柳田国男が近畿以東の地方で「初婿入り」をウチアゲという点に着目し、ウタゲとは「打ち明け」の意であり、男が娘の親に關係を打ち明けることであると解釈している。<sup>(注2)</sup>ウタゲの民俗語彙については渡邊欣雄が諸説を整理して、語源的には確定しえないものの、宴の語義としての重要な意味成分は「主客相互の人間關係、あるいは神人關係の存在」と「象徴的共食の慣行」であると述べているのが参考になる。<sup>(注3)</sup>渡邊は宴で饗される共食物は呪力を帯びた象徴的意味合いをもつという。こうしたウタゲの定義は古代の宴も含めて宴の普遍的構造をいいあてている。神を迎えて神人共食し、非日常的な時空に心身を解き放つことが宴であり、ウタゲはそうした営みを表す民俗の言葉として上代から生き続けている。

宴はまた、トヨノアカリとも訓まれる。トヨは豊かな生命の充溢をほめ讃える言葉。アカリは酒を飲んで顔が赤くほてることという『古事記伝』の解釈が定説となつていふ。ただしウタゲという言葉が今日まで命脈を保っているのに対して、トヨノアカリの方は一般にはもう使われない。歴史の消長と運命を共にしたきわめて歴史的な言葉であつたといえる。上代文献では「豊明」「豊樂」などの漢字表記で現れる。

①天皇、豊明聞こし看しし日に、髪長比売に大御酒の柏を握らしめて、其の太子に賜ひき。(応神記)

②太后豊樂したまはむと為て、御綱柏を採りに、木国に幸行でまじし間に、天皇、八田若郎女と婚ひしたまひき。(仁徳記)

③難波の宮に坐しましし時、大嘗に坐して豊明為たまひし時、大御酒に宇良宜て大御寝したまひき。(履中記)

④天皇、長谷の百枝槻の下に坐しまして、豊樂為たまひし時、伊勢国の三重の采女、大酒盞を指挙げて献りき。(雄略記)

⑤・・やすみしし 吾が大君の 神ながら 思ほしめして 豊宴めす今日の日は・・(万四二六六)

上代の確例を引いたが、ほかに「豊明りに明りまさむ皇御孫の命」『大嘗祭祝詞』『豊の明りに明り御坐しまさむ』『中臣寿詞』などの用例もある。ここに共通するのは、宴の主催者が天皇あるいは皇后であり、また古事記では応神記以降に限られるという点である。⑤は大伴家持が正月の賀宴に供するために予め作歌したもの。トヨノアカリという語がある種の雅語的な響きをもつのも、それが宴一般を指すものではなく、天皇を中心とする宮廷の宴を意味するからだろう。民俗の言葉と王権の言葉という位相的な差をウタゲとトヨノアカリの語は色濃く示している。

遠来のものに酒食をもてなす意を表す語に「饗(アヘ)」がある。宴も主人が客に供応する行為を含むから、実質的には饗は宴の一部を構成することになるが、日本書紀では「饗」と「宴」を概ね区別して使用している。神武から応神までの物語的な色合いの濃いところでは、ウサツヒコ・エウカシ・オトウカシが皇軍に(神武即位前紀)、吉備臣が天皇に(応神紀)「饗」するもので、ともに在地土豪が朝廷に恭順の意を示す行為として用いられており、これらは岡田精司が論じているように大化前代の服属儀礼としての食物供献儀礼の反映と見てよいものである。<sup>(注4)</sup>仁徳紀以降では、朝廷が中国朝鮮などの使者や蝦夷隼人などの「化外の民」に「饗」する例に集中する。

さらに持統紀になると「公卿大夫」「百官人」へとその対象が広がっていく。こうした事実は、中国王朝の巨大な藩屏体制の末端に組み込まれながらも、自ら「小帝国」を志向して相対的な自立性を確保しようとした古代大和王権の政治的姿勢を示すものである。来朝した朝鮮諸国の使者に位階を与え（舒明十一年）、帰順した蝦夷に「贈給（にぎわす）ように物を給う意、日本古典文学大系頭注」するのは、諸蕃と化外を体制下に位置づけようとする政治的意志の現れにほかならない。古代国家の体制強化にともない、「饗」の部分が「宴」から分離しそれ自体として政治的機能をもつようになるのである。そうした「饗」の行為は、一種の外交権に属すから、その行使は王権によって独占されていく。六世紀の筑紫の磐井の反乱が大陸諸国との外交権の奪取を契機に発生したことは、古代の大和王権にとっていかに外交権が重要であったかを物語っている。

「饗」の部分がそのように分離し政治的機能を強化していくに従って、「宴」そのものの実質も変化させるをえない。本来、神を迎えて神人一体化する時空を現出する宴の場が、天皇と臣下の支配と服属の関係を確認し強化する政治的な場へと質的に変化する。従って、宴の主催権も必然的に天皇によって占有される傾向を強めていく。日本書紀の「宴」の記事は四十数例を数えるが、そのほとんどが天皇主催のものであるのも、天皇家の歴史記述を中心とする文献の性格からみて当然の現象とはいえ、上記の傾向と無関係ではないだろう。そのことは、僅かではあるが、天皇以外の人物が主催した日本書紀の「宴」の記事を検討することによって逆に伺うことができる。ひとつは、允恭紀五年の記事で、反正天皇の殯宮大夫に任命された玉田宿祢という人物が職務を怠り「男女を集へて酒宴」をしてい

たというもの。報告を受けた天皇が使者を派遣すると、玉田宿祢は使者を殺して武内宿祢の墓域に逃げ隠れた。その後あらためて召し出すと、玉田宿祢は衣の中に鎧を着ており、天皇は「兵を設けて殺そうとする。その気配を察知した宿祢は密かに自宅に逃げるが、天皇は軍をおくって誅殺したという。古代において天皇亡き後の殯宮期間中は政権をめぐってしばしば反乱や謀反が起きたから、これも一種の謀反の記事と見てよいだろう。玉田宿祢は葛城襲津彦の孫（ただし雄略紀では子）とあり、逃げ隠れた武内宿祢の墓も帝王編年記によれば大和国葛下郡にあり葛城氏の本拠地だから、葛城氏の朝廷への謀反を伝える記事と思われる。「男女を集へて」というのは氏族こそって集団をなしていたということだろう。たんに職務の怠慢を諫めたのではなく「誅」へと至ったのも、「宴」がただの娯楽行事ではなく、徒党を組んで謀反の気配を漂わせる政治的色彩をもっていたからだともう。もう一つは景行紀二十七年の熊襲討伐記事。

秋八月に、熊襲又反きて辺境を侵すこと止まず。

冬十月の丁酉の朔己酉に、日本武尊を遣して、熊襲を撃たしむ。

十二月に、熊襲国に到る。・特に熊襲に魁帥者有り。名は取石鹿文、亦是川上梟帥と曰ふ。悉に親族を集へて宴せむとす。

古典文学大系本は「宴」をニヒムロウタゲ（古写本の古訓）と訓み「文意によってニヒムロの語を加えたものであろう」と頭注に記すが、倉野憲司『古事記全注釈』がいうように無理な訓だろう。古事記に「御室楽」とあることからニヒムロの訓が考えられたものと思われるが、やはり古事記とは別個に日本書紀の文脈に沿ってみるべきである。八月反乱、十月平定軍派遣という一連の流れの中に十二月の記事がおかれているところからすれば、ここでの「宴」は先の

允恭記の記事同様、一族結集し戦意を高揚する集宴という感が強い。

古代国家が氏族制から官司制に移行するに従って宮廷での宴は節日として制度化される。それと並行して地方で開かれる宴も、太宰府では帥が、諸国では国司が管掌するものと令文に規定されるようになる。また、氏族が行う氏神祭も律令政府によって規制される傾向にあったことが、続日本紀（文武二年、大宝二年）の賀茂祭禁断記事などから伺える。<sup>（注5）</sup>京畿内の歌垣が政府によって禁圧されていくことも含めて、国家管理の及ばないところで行われる民衆の集結にたいしてつねに危機感を抱く支配者の意識をみてとることができ。允恭紀の場合も、そうした危機感と通底する支配者側の生理的不快感が滲んでいるように思われる。「宴」を張ることが朝廷に対する相対的独立性を保とうとする叛意の表れでもあるかのように描かれているといってもよい。そのことは、同じく天皇以外が宴席を設ける場合でも、朝廷への謀反や反乱と関わらない場合には、日本書紀では「宴」の文字を使わないという現象にも表れている。

播磨国司山部連の先祖伊予来目部小盾、赤石郡にして、親ら新嘗の供物を弁ふ。<sup>（中略）</sup>適縮見屯倉首、新室に縦賞<sup>あそび</sup>して、夜を以て昼に継ぐるに会ひぬ。<sup>（顯宗即位前紀）</sup>

「縦」は、ほしいままにする意。「賞」は、たのしみあそぶ意。新室寿きの饗宴に昼夜をわかつ浸るようすを描いている。物語は、そこで馬飼い・牛飼いに身をやつしていたオケ・ヲケ王を発見し、都に迎え入れて顯宗・仁賢として即位するというように展開する。皇子発見の直接の功績は、屯倉首の「僕、此の秉燭せる者を見れば、人を貴びて己を賤しくし、人を先にして己を後にせり。恭み敬ひて節に赴き、退き譲りて礼を明らかにす。君子と謂ふべし」との言に

よるから、屯倉首は忠君の士として描かれている。播磨国風土記には「新室の宴」とあるが、日本書紀は「宴」の文字を使わない。微妙な例ではあるが、日本書紀において「宴」は天皇あるいは宮廷が主催する政治的行為として編者たちに意識されていたものと思われる。「宴」の字義は、安らかに憩うこと（説文）だから、天皇の権威や徳によって天下安らぎ泰平を謳歌する君臣和楽の饗宴が、日本書紀の「宴」であった。

そうした天皇の権威も本来は、自然の農耕サイクルを秩序づけそれと一体化するところに基盤をもつところから上昇したものだから、宴の開催も自然の時間の秩序に沿って行われる必要があった。日本書紀についていえば、宮中の宴は正月に設けられることが最も多く（十六例）、以下三月（五例）十月（四例）九月（三例）十一月（二例）と続く。これは令制の節日（正月一・七・十六日、三月三日、五月五日）とほぼみあう。正月が最も多いのは、一年が改まる節目というだけでなく、古くは正月即位の慣行があったと考えられることとも関係しよう。<sup>（注6）</sup>特に正月には一般の宴よりも大規模に酒宴が設けられた例もある。安閑二年正月に、穀物が稔り、国境に外敵の憂いや万民に飢餓の憂いなく、天皇の仁慈が全土に広がり、天子を讃める声が天地に充滿し、国家の繁栄を喜び、「大きに酺<sup>さけのみ</sup>すること五日にして、天下の歡びを為す」との記事がある。漢籍（史記、漢書等）に基づく文飾とはいえ、古代の史家が理想とした饗宴の姿を垣間みることができる。類似の記事は天武紀元年正月にもある。ただその一方で、いたずらな宴の開催は天皇といえども非難されることがあったようだ。天智七年七月、天皇は「舍人に命じて、宴を所所に」催した。その行為に対して「時の人」が「天皇、

みいのちをばりなむとす

天命將及るか」と諷したという。日本古典文学大系の頭注によれば「天命將及」は中国では王朝交替を意味するという。ここでの「舍人」は天皇に私的に仕える側近者で、そうした者を対象に宴をしきりに設けることは、天皇本来の宴の主催権から逸脱する行為だったのだろう。時人の声はそうした逸脱に対してある種の不吉さを感じての非難の声として受け取ることができる。

### 3、古事記の宴

古事記でもさまざまな酒宴の場面が描かれるが、日本書紀と異なつて「宴」の文字はなく、「楽」をウタゲと訓ずる例が六例(二場面)ある。

①小碓命、その姨倭比売の命の御衣御裳給はり、釵もちて御懷に納れて幸行しき。かれ、熊曾建が家に到りて見たまへば、その家の辺に軍三重に囲み、室を作りて居りき。ここに、御室楽せむと言ひ動みて、食物を設け備へたり。(景行記)

②しかして、山部の連小楯、針間の国の宰に任せし時に、その国の人民、名は志自牟が新室に到りて楽しき。ここに、盛りに楽しんで、酒酣にして、次第もちてみな舞ひき。(清寧記)

①②の「楽」は『古事記伝』をはじめとして現行の諸注釈書の多くがウタゲと訓んでいるが、猪熊本・寛永本などエラグ・エラギと訓む本もあり、日本思想大系本が従っている。古事記は天岩屋戸でのウズメの神懸かりの所作も「楽」と表記している。ウズメの「楽」はアソビと訓まれ、激しく舞い踊るようすをいう。仲哀記の「酒楽之歌」は二字で熟してサカグラ、またはサカホカヒと訓むのだろう。

ウズメの例は酒食を伴わないから、①②と區別して、広く非日常の世界に心身を解放して生命力を活性化する意を表すアソビがふさわしい。もちろん酒宴もアソビの一種ではあるが、それと特定するにはウタゲかエラギのいずれかということになるが、決定は難しい。エラギは続日本紀宣命三八詔などに仮名書き例があり、楽しみ笑う意とされる。古代の宴も現代と同じく、酔客の哄笑に満ち溢れていたであろうことは想像に難くないが、しかし宴を一般的にエラギと称したかとなると疑問も残るので、今はひとまず通説のウタゲを採用する。いずれにしても本稿にとつて興味深いのは、「楽」一字で表記する酒宴と「豊明」「豊楽」とは、古事記では區別されている点である。古事記のトヨノアカリは先に挙げた例の他につきの諸例がある。

⑥この時の後、豊楽したまはむとする時に、氏氏の女等、みな朝参りす。しかして、大楯の連が妻、その王の玉釵をもちて、おのが手に纏きて参赴けり。(仁徳記)

⑦また、一時、天皇、豊楽したまはむとして、日女嶋に幸行しし時に、その嶋に雁、卵を生みき。(仁徳記)

⑧その山の口に留りて、すなはち飯宮を造りて、たちまちに豊楽したまひて、すなはちその隼人に大臣の位を賜ひ、百の官をして拝ましめたまふ。隼人歓喜して、志遂げつとおもひき。(履中記)

⑥は反逆者とみなされて殺された女鳥王の手から腕輪を奪い、妻に与えた將軍山部大楯を死刑に処した話。この例からは宮廷の酒宴に氏族の女も参加したことがわかる。⑦は行幸先での酒宴。雁の産卵というめずらしい出来事について天皇が武内宿禰に質問し、宿禰は「なが御子やつひに知らむと雁は卵生らし」と答えたという。酒宴の

場が、天皇の繁栄を予祝する場になっている。⑧は反逆を企てた墨江中王を殺そうとした水齒別命（後の反正天皇）が、王の近習者である隼人ソバカリを教唆して主君を殺害させる話。水齒別は、主君を殺せば自分が天皇になったときに大臣にすると約束し、その目的を果たす。しかし主君を殺したソバカリを賞するのは「義」にもとり、また功に報いないのは「信」にもとるとの儒教的な煩悶の中で一計を案じた。それが引用の個所である。酒宴の主催者は即位前の反正であるが、ソバカリを謀る舞台に「豊楽」が設定されているのは、その主催が天皇の権限に属するものという意識があるからだろう。酒宴の場で大臣位が授与されるのは、日本書紀の宴の記事や平安朝の饗宴でしばしば「賜祿」が行われるのに対応する。饗宴での賜祿は本来、来臨した神が宴の参加者に靈力を分配することによって生じた二次的変化と考えられる。

トヨノアカリの用例が応神記以降に限られているのは、古事記が描く王権発達の構想と照応するものと思われる。神武の東征にはじまり、ヤマトタケルの東西平定、神功・応神母子の新羅平定を経て、応神朝に至って「小帝国」の体制を整えたというのが古事記の基本的構想である。「豊楽」の盛行は、そうした王権の確立と安定を象徴的に描く。従って、同じく酒宴であっても、神武東征下の戦いのさなかに設けられたものは「饗」として区別される。

しかして、その弟宇迦斯が献れる大饗は、ことごとその御軍に賜ひき。この時に、歌ひしく、

宇陀の 高城に 鳴罌張る わが待つや 嶋はさやらず いすくはし 鯨さやる 前妻が 菜乞はさば 立ちそばの 実の無

けくを こきしひゑね 後妻が 菜乞はさば いちさかき 実の多けくを こきだひゑね ええ （音引け） しゃごしや。こはいのごふそ。ああ（音引け）しゃごしや。こは嘲笑ふそ。（神武記）

久米歌六首中の第一首。酒宴に並んだ鯨肉を肴に酔いしれるさまや、古女房がおかずをほしがった実の無いところを少しだけ、新妻には実のたくさんついたところをどっさりくれてやれといった口吻に、古代の饗宴の活気と猥雑さが伝わってくるようである。久米歌が大嘗祭の饗宴において舞踏と共に唱われたものであり、さらには久米歌を含む神武の東征物語そのものも大嘗祭という王権祭式から「脱化」したものと論じた西郷信綱の説は著名である。<sup>(注7)</sup> 一世一度の大嘗祭の制度化は、天武・持統朝のころとするのが近年の通説だが、歌そのものの成立は、藤井貞和がいうように<sup>(注8)</sup> 三世紀代まで遡るかどうかは別としても、かなり古いとみるべきだろう。西郷が論じているように、久米歌は饗宴の歌謡であると同時に戦闘の歌謡であるという点にその特徴があり、王権の濫觴期の戦いの時代を記念するにふさわしい歌である。その意味で王権の確立と安定を謳歌する「豊楽」の雰囲気さをなかに伝えるものというより、それよりも古格の饗宴歌謡というべきであろう。

王権の安泰を謳歌するトヨノアカリのようなすを描いているのは天語り歌三首を核に構成された雄略記の物語であろう。

⑨纏向の 日代の宮は 朝日の 日照る宮 夕日の 日がける宮  
竹の根の 根垂る宮 木の根の 根蔓ふ宮 八百土よし い築  
きの宮 真木さく 日の御門 新嘗屋に 生ひ立てる 百足る  
槻が枝は 上枝は 天を覆へり 中つ枝は 東を覆へり 下枝

は 鄙を覆へり 上枝の 枝の末葉は 中つ枝に 落ち触らば  
へ 中つ枝の 枝の末葉は 下つ枝に 落ち触らばへ 下枝の  
枝の末葉は あり衣の 三重の子が 指學せる 瑞玉盞に 浮  
きし脂 落ちなづさひ 水こをろこをろに 是しも あやに恐  
し 高光る 日の御子 事の 語言も 是をば (100)

⑩倭の この高市に 小高る 市の高処 新嘗屋に 生ひ立てる  
葉広 五百箇真椿 其が葉の 広り坐し その花の 照り坐す  
高光る 日の御子に 豊御酒 献らせ 事の 語言も 是をば  
(101)

⑪もしきの 大宮人は 鶉鳥 領巾取りかけて 鶉鳥 尾行き  
合へ 庭雀うずすまり居て 今日もかも 酒みづくらし 高光  
る 日の宮人 事の 語言も 是をば (102、以上天語歌)

⑫水そそく 臣の嬢子 ほだり取らすも ほだり取り 堅く取ら  
せ 下堅く や堅く取らせ ほだり取らす子 (103、うき歌)

⑬やすみしし わが大君の 朝とには いより立たす 夕とには  
いより立たす 脇机が下の 板にもが あせを (104、しつ  
歌)

長谷の百枝楓の下での豊樂の折、伊勢国の三重の采女が献じた酒杯に楓の葉が落ちていたのを天皇がとがめた時に、采女が歌ったとされるのが⑨。天語り歌は本来、<sup>(注9)</sup>地方族長の宮廷への服属の誓約として歌われた宮廷寿歌であり、また「皇室にたいする隷属を宗教的な形式で再確認するための神事歌謡」<sup>(注10)</sup>で、類似の表現をもつ八千矛の神語りと比べて「はるかに質が低い」という石母田正の厳しい批評もある。古代王権の文学的創造力という問題を考える時、石母田の批評は避けて通れないが、その前に歌そのものの表現の質をもう一

度見定めておく必要がある。

「纏向の」以下冒頭の一四句はいわゆる宮讃めの句で、宴の開かれる場を広く賛美したものの。雄略朝の歌に纏向の日代の宮という景行天皇の宮殿が歌われていることについてはさまざま意見がある。西郷『古事記注釈』は、「まきむく」が下の「まきさく」と共鳴し、「日代の宮」が「日照る宮・日がける宮」と響き合うことを指摘し、「纏向の日代宮」は伝承上の美称で普通名詞に転じる性質のものと述べている。詩の韻律やイメージの問題として西郷の指摘は首肯できるが、その上でやはり景行朝との何らかの関連は否定できない。土橋寛『古代歌謡全注釈古事記編』は、独立の宮廷寿歌が景行天皇に起源を求めて物語化されその後雄略の話に改められた可能性が大きいという。景行朝は、古事記の描く王権発達史において、国内平定を成し遂げた画期的な時代として位置づけられているから、王権の安泰を言寿ぐ宴の讃歌が景行朝を喚起する宮讃めによって歌い起こされることは十分ありうる。雄略朝という一回的な時間に王権確立の始源の時を呼び込み、俗世の時間とは異なる神話的時間を仮構するのが冒頭の表現であろう。それは「浮きし脂落ちなづさひ水こをろこをろに」の句が国生みの始源を喚起し、それと一体化する時間を装うのと同じ原理に基づく。つまりこれらの句は、俗なる時間を無化していつきに始源の時に転換させる指標であり、その聖なる時間が宴全体を覆っていることを表象するものだと思う。歌は宮讃めに続けて、新嘗の場に聳える楓の木が「天」「東」「鄙」を覆っている歌う。「東」と「鄙」の対応は必ずしも整合的ではないが、国土全体を「天」が覆っているという言い方は、ヤマトタケルが景行の命で「西の方」「東の方十二道」(景行記)を平定する物語の空



間的構図と基本的には相通うものである。<sup>(注11)</sup> その楓の葉が「上つ枝」から「中つ枝」「下つ枝」に触れるというのは、楓の葉の霊力が接触によって蓄積されていくことを意味する(土橋前掲書)。蓄積された葉の霊力は酒杯の酒に凝縮され、それを飲むことで楓と酒の霊力は天皇の身体に取り入れられる。楓の木が天と国土の全体を覆うというのは、宴の場が宇宙全体と同置する空間として立ち現れているということである。そうした場の全体性と宴の主催者である天皇が、呪力の感染を通して融け合い一体化するさまを⑨は表現している。

⑩は景+情という古代歌謡の基本的構造を持ちつつ、宴の座に生い茂る椿の生命力と天皇の生命力を融即的に賛美しているという意味でやはり場と人の融合を表現している。⑪はその場に参加する「大宮人」が酒に浸るようすを歌う。森朝男が「この大宮人の「酒漬づく」座は、神降臨し天皇も同座する聖なる空間」であり「その聖空間を言寿ぐもの」と述べているように、<sup>(注12)</sup> 宴の場そのものの聖性を歌うものと見うる。さらにその言寿ぎが「大宮人」が衣の裾を交わすほどに群れ居る一体感の中になされているところに、座と人々との濃密な関係をみることができ。「鶴鶴尾行き合へ」という句も、西郷『古事記注釈』が、イザナキ・イザナキに初めて「交の道」を教えた鳥とする日本書紀(神代下)の記事を引用して、滑稽かつ猥雑な所作に基づくものと推測しているように、性の匂いに浮き立つ座の雰囲気を感じ出している。「うずすまり」は用例のない語ではあるが、集い群れることをいうと思われる。神楽歌(二)に

神葉の 香をかぐはしみ 求め来れば 八十氏人ぞ 円居せりける 円居せりける (採物)

とあり、宴の参加者は本来、身を寄せ合うように円座を組んでいた

のではないかと思われる。そこには当然、身体の接触を含めた肉感的な交感の場が形成されていたはずで、そうした交感を通して人と人、神と人との融合がはかられるのである。⑨の「なづさふ」という語も、たんに水に浸る意だけでなく、場を構成する呪物とその呪力に浸る参加者が親和し融け込む響きをもっている。

幣にならましものをすべ神の御手に取られてなづさはましを  
(神楽歌七)

これはみずから幣となることで神に触れたいと希求するもので、「愛する人への恋の歌」(日本古典文学全集)とも読みうる歌である。⑬はそうした恋歌的発想が一層あらわになっている。

宴と性の問題について森朝男は、天語り歌の采女の献杯儀礼を「服属儀礼でありつつかつ婚儀礼でもある」としたうえで、つぎのように述べている。

采女はいってみれば、神妻としての神への親和のあり方を、豪族の天皇への服従奉仕に移行せしめられた者たちである。さらにいえば、性的な親和の関係の中に、支配・服従の対立的関係を溶解させられる者たちであったことになるのである。そして宴とは、そのような対立的関係の親和的関係への転換・溶解を演出する場であったことになるのである。<sup>(注13)</sup>

この指摘は、宴と王権の意味的関係を鋭く言い当てている。ただしそれは古事記の描く宴においてもっとも端的に現れていると見るべきであろう。同じく祝宴の歌でも、日本書紀ではそうした色めく気配はかなり希薄になっている。

置酒して郡卿に宴す。是の日に、大臣、寿上りて歌ひて曰さく、  
⑭やすみしし 我が大君の 隠ります 天の八十蔭 出で立たす

御空を見れば 万代に かくしもがも 千代にも かくしもがも  
も 畏みて 仕え奉らむ 拝みて 仕へ奉らむ 歌献きまつる  
(紀102)

天皇、和へて曰はく。

⑮真蘇我よ 蘇我の子らは 馬ならば 日向の駒 太刀ならば  
呉の真刀 うべしかも 蘇我の子らを 大君の 使はすらしき  
(紀103) (推古紀二〇年正月七日)

古事記に顕著だった采女や氏女といった女たちの姿は影をひそめ、推古の祝宴においては男が賀歌を奏上している。天皇の応えた歌も「駒」「太刀」という武力を象徴するものによって臣下を讃えている。その表現からは女帝の性を露にするものはない。いわば中性化した王と臣下の応答として支配と服属の関係が確認されるだけである。男たちの官僚機構が国家の中心を占めるに従って、性の対立と融合の幻想は王権の内部に隠匿され、公の世界は性を超越あるいは無化したところに自らを表現していくようになる。そうした王権の歴史的、質的变化の過程がその背景にあるものと思われる。

#### 4、おわりに

古事記には恋と戦いの物語が多い。特に下巻以降は恋愛と王権をめぐる闘争がその主調をなす。そうした物語は、男と女、兄と弟、天皇と豪族など、さまざまな対立の構図を内在させつつ、正当を任ずる王の側につねに勝利をもたらす。対立の顕在化は、登場人物や場面を生き生きと描くためには不可欠の要素だから、それは物語そのものの要請であったともいえる。しかし同時に、顕在化した対立

を克服し融和へと導いたところに立ち現れるのは試練を経て成長した王と王権の姿だから、物語の活性化は王権内部からの必然的な要請でもあったといえる。そこには物語によってのみ自己表現をなしている王権像がある。古事記は、そうしたきわめて物語的な王権像をトヨノアカリという非日常的な時空に描いている。高揚した精神と座に生ずる一体感は、支配と服属というあらわな政治の力学を隠蔽し、神と人の和楽の世界を現出する。宴に臨む天皇は、たんなる抽象的な権威としてではなく、集団あいなずむ肉体的存在として座の中心に立つ。色めく宴の雰囲気はそうした王権の肉体性と強く結びれているのである。

注1、折口信夫「国文学の発生(第三稿)」『折口信夫全集第一巻』中央公論社

注2、柳田国男「常民婚姻史料」「定本柳田国男集第一五巻」筑摩書房

注3、渡邊欣雄「宴の意味」「日本の美学8」ペリかん社、一九八六年

注4、岡田精司「大化前代の服属儀礼と新嘗」「古代王権の祭祀と神話」塙書房、一九七〇年

注5、倉林正次「饗宴の研究(祭祀編)」桜楓社

注6、倉林正次「正月儀礼の成立」「饗宴の研究(儀礼編)」桜楓社、一九六五年。和田萃「タカミクラ朝賀・即位式をめぐって」「日本政治社会史研究 上」岸俊男教授退官記念会編、塙書房、一九八四年

注7、西郷信綱「神武天皇」「古事記研究」未来社、一九七三年

注8、藤井貞和「古代文学史論」「岩波講座 日本文学史」第一巻、一九九五年

注9、土橋寛「宮廷寿歌とその社会的背景」「古代歌謡論」三一書房、一九六〇年

注10、石母田正「日本神話と歴史」「日本古代国家論 第二部」岩波書店、一九七三年

注11、太田善麿『古代文学思潮論』はこの三分法を「きわめイデオロギ  
ツシュ」と述べている。多田元「天語り歌の位相」(『古事記の歌  
古事記研究大系9』古事記学会論編、高科書店)は「高光る日の  
御子」が景行記と雄略記の双方にあることに着目し、ヤマトタケ  
ルとワカタケルが「制圧者として近似する」点から冒頭の地名の  
問題を論じている。

注12、森朝男「景としての大宮人」『古代和歌と祝祭』有精堂、一九八八  
年

注13、森朝男「宴と性」『古事記の歌 古事記研究大系9』古事記学会、  
高科書店、一九九四年

(本文中の古事記の引用は日本古典集成による)

(文学部助教授)